堕落した女プリースト

神をも裏切る執着快楽責め

猪熊夜離

彼女と擦れ違った男は思わず振り返らずにはいられなかった。

女性にしてはやや高めの身長に凹凸の激しい肉感的なボディ。どこにいても目立つピンクのロングヘアーの下には、大きな母性と神の慈愛を感じさせる美しい顔。年齢は二十代前半といったところ。

首から下に視線を巡らせて男たちは納得する。彼女が着ているのは教会の聖職者が身に着けるユニフォーム。女プリーストの正装とも呼べるロング丈のワンピースだ。ただし、とある目的のため飛んだり走ったり、大きなアクションが必要になる彼女のユニフォームはサイドスリットが普通よりも深い。腰まで切れ込みが入った服から白く美味しそうな太ももや、俗に安産型と呼ばれるボリューミーなヒップがこぼれ出していた。

聖職者然とした上品な顔立ちの女が男に使われるためのスケベボディを揺らして歩いているだけでも男ならば第三の足が生えてくるところ、裾をめくり上げればすぐにでも性交可能な格好でうろつかれては辛抱堪らん。しかも、いま彼女がいるのは余所からの客など滅多に来ない山奥の村である。

久しぶりに訪れた客が都会からの美女というのでは男たちに我慢しろと言っても無理なこと。

彼女が村の大通り――といっても大人が横に五人も並べば一杯になる――とき、下半身

をパンパンにした三人組の男が声をかけた。
「なあ姉ちゃん！　こんな辺鄙なとこに一人で何してんの？　俺たちと遊ぼうぜ」
　彼らはナンパする相手を間違えたことに気づかない。それもそのはず。彼らの常識からすれば、目の前の美女は自分たちに力尽くで組み伏せられ、神の意志に従うよりもっと手っ取り早く、気持ち良く、天国に連れて行ってもらう機会を待っている哀れな雌でしかない。
　だがこの女――カテリーナ・マリアンネ・エレールマイヤーの正体は、王国教会総大司教直属組織『摂理の司』に所属する、特別なプリースト。聖なる力で身を守り魔物と戦うのが彼女の務めだ。そのため戦闘力は一般人以上であり、並大抵の男であれば束になっても相手にすらならない。
「俺たちが親切で誘ってるんだ。なんか言ったらどうなんだ」
　だから田舎の三下どもが凄んだところで、彼女の眉ひとつ動かすことはできないのだ。
　男の一人が馴れ馴れしく肩に手を伸ばすと、マリアンネは相手に柔らかく笑いかけた。
「私、あなたたちのような方を探していました」
　虚を突かれた一言に男たちは一瞬だけ固まる。この女プリースト、聖職者のくせに実は好き者なのか？　どうりで男に媚びたドスケベ衣装のはずだと都合が良い方向へ納得する。
「おーそうかそうか。なら俺らと楽しいことしようぜ。たっぷり可愛がってやるよ」

「それはとても魅力的な提案ですけれど……」
マリアンネは肩に置かれた男の手に自分の手を添えると、軽く捻り上げた。途端に彼は悲鳴を上げて地面に倒れ込む。
「ぐわあああっ！　て、手が折れ……折れてるぞ！」
仲間の男が叫んだとおり、地面に倒れた男の手首は不自然にぶらーんとしている。激痛が走っているらしく手首を反対の手で抑える彼の顔には、大粒の脂汗が急速に浮かんできた。文字どおり顔色を変え激痛を訴える仲間の様子に、他の二人がようやく事の重大さを認識した。
「てめぇ何しやがる！　ただじゃおかねえぞ！」
「はい。残念ながら私も、あなたたちを見過ごすわけには参りません」
彼女は右手を水平に振り切った。いつの間にか握られていたチェインが近くにいた男たちの顔を横薙ぎに払う。
ガツッ！　ゴキッ！　という骨を打つ音が連続し、彼らの身体が面白いように宙を舞う。周りで見ていた男たちは、まるでボールのように吹き飛んだ仲間の姿に唖然とした。しかし、彼らが驚きに固まっていたのは束の間のこと。我を取り戻すと口々に怒声を発し始めた。

「こ、このクソアマがあああっ！」
腰の短剣を引き抜いた男が一直線に飛びかかる。怒りのせいか動きは単調だった。正規の訓練を受けた経験がないことは一目瞭然。マリアンネは冷静に見極め、ひらりと身をかわす。
目標を失った男は足をもつれさせて地面に転倒した。起き上がろうと足掻く彼にマリアンネは追撃をかける。地面から飛び上がり、垂直に急降下すると男の背を思い切り踏みつけた。さらに地面に押し付けるようにグリグリ踏みにじると男は悶絶の声を上げる。
彼女は更に力を込め、相手の肋骨を踏み折った。男の顔色が変わり、口から絶叫が上がる。それを無視してマリアンネはさらに足に力を込めた。骨の砕ける感触とともに、肉が裂けるような音が続く。絶命寸前といったところだろう。
なおも彼女の容赦ない攻撃は続く。背中に乗っていた足を外すと同時に再びチェインを振った。側頭部に金属の一撃をくらった男は絶命する。
「よくも仲間を！」
「教会の聖職者がそんなことしていいのか！」
「教会の人間だからこそ、です」
男たちの怒声の中からひとつをマリアンネは耳聡く聞き咎める。それこそ彼女がこの村

を訪れた理由だった。
「あなた方は既に亡くなっています。この村は数十年も前に近くの火山から流れてきた有毒ガスにより村人が全滅した廃村なのです」
　マリアンネは男たちの注意を引くため、敢えてチェインを振り回しながら叫ぶ。
「あなたたちは死んでいながら、肉体への未練に囚われて成仏できないでいました。そこに付け入った魔物が、あなたたちをグールとして甦らせたのです」
「何を馬鹿なことを」
「信じたくなければそれでも構いません。ただ、私は魔物に操られたまま魂の救済が得られない人を放っておくことはできません。そのために私は教会の命を受け討伐にやってきたのです」
「黙れ！　適当なことを言うんじゃねぇ！　魔物なんかいるかよ」
「いるんです。あなた方は魔物の力で甦ったため自分や仲間の姿を正しく認識できなくなっているのです。本当はもう……あなた方には、骨が折れて痛みを感じる神経など残ってないんですよ」
　マリアンネが腕を振るう。風を切ってチェインが唸った。
「そ、そうだ。俺たちは死んじまったんだ！　俺たちは化け物になっちまったのか？」

「そうですね。ですから私が解放して差し上げます。あなたたちの罪を許しましょう」
「嫌だ。せっかく生き返ったんだ。化け物でも死にたくねえよ」
「大丈夫。すぐに終わります。私に身を委ねてください」
彼女は優しく語りかけると、男たちに一歩近づいた。
そして、神の代行者として彼らに永遠の安息を与えた。

※

「以上が今回の顛末です」
「ご苦労でしたマリアンネ」
アンデッドの男たちを退治した後、教会本部の大聖堂にマリアンネの報告が届いた。
報告を聞いたのはこの教会の大司教である女性。マリアンネは彼女直属の部下ということになる。
デスクの前で膝をついて頭を下げる彼女に総大司教は労いの言葉を掛けた。
顔を上げたマリアンネを見て、ふっと総大司教は表情を崩す。この顔を見るのがマリアンネは好きだった。無言の内に逞しくなったなと褒められている気がする。

「あなたの働きのおかげで、村人の魂を救うことができました。これは教会にとって喜ばしいことです」
「はい」
「今後も期待していますよ。マリアンネ」
「ありがとうございます。総大司教様の御心のままに、お仕え致します」
マリアンネは深く頭を垂れた。彼女の使命は王国と教会の秩序を守ることだ。この国を魔物の脅威から守るためには、今後も努力を惜しまないつもりだった。
総大司教は穏やかな笑みを維持したまま、ゆっくりとした口調で話し始めた。
「さっそくのことで申し訳ありませんが、また姉妹には調査に赴いてもらいたいのです」
「私でできることでしたら何なりと。この身は神に捧げてますゆえ」
「そう言っていただけると思っていました。皆がマリアンネのように敬虔な信徒であればと思うと……嘆かわしい限り」
「総大司教様。そのようなお言葉は恐れ多いことです」
「良いのですよ。あなたのような素晴らしい部下に恵まれて、私は幸せ者だと思っているくらいですから」
「勿体無い御言葉で……」

頬を赤く染めるマリアンネを微笑ましく見守りつつ、総大司教は続けた。

今回、調査対象になっているのは近隣国の国王だった。コンスタンティンという王は先王が急逝したため若くして即位。年齢はマリアンネと然程離れてないそうだ。即位式典を見物した人間の噂によれば大層な美丈夫で、その場にいた女は誰も彼もが見惚れていたとか。

顔が良いだけでなく剣術と乗馬が趣味というだけあって体は程よく鍛えられ健康的。今度の王様は百歳まで長生きしそうだと市井の言の葉に乗っている。

ただし、若くて健康を持て余した男だから仕方ないのか、女癖の悪さも多く聞こえてくる。曰く王太子宮のメイドは彼が成人を迎える十五歳までに全員お手つきになったとか、女五人を同時に寝室へ連れ込み翌朝メイドが起こしに行くとベッドの上で死に体になっていたのは女たちのほうで、そのままコンスタンティンはメイドにも手を付けたとか。

とにかく、噂を総合するとコンスタンティンという王は若くてイケメンで文武両道に優れた秀才だが、英雄色を好む性格で有り余る体力を女たちに注ぎ込む精力絶倫な人物らしい。

女の敵であると同時に欲望や堕落に抗うことを教える教会の敵でもあった。

「単なる放蕩者の王かと思いましたが最近にわかに良くない話を聞きました。彼が魔物と取り引きして怪しい薬を手に入れているというのです」

「それは事実ですか」

「王宮で働く侍従からの内部告発がありました。この秘密を知ってしまった以上、隠しておくことは主を欺くことになるため良心の呵責に耐えられないと」
「その中身は、どのような？」
「残念ながら詳しいことは不明です。しかし、内部告発した侍従の話によれば、薬は男女の睦みごとに関係ある可能性が高いでしょう。つまりは性行為に関する効能のある薬物だと」
マリアンネは唾を飲み込んだ。聖職者としては耳を塞ぎたくなるような内容だった。しかし、魔物が絡んできているとなっては聞かぬ訳にいかない。
性行為に関する薬とはどのようなものだろうか。まさか噂に聞くコンスタンティン王の性欲絶倫ぶりは、魔物と契約して手に入れた薬によるものなのか？　マリアンネには理解できない。人外の存在と取り引きしてまで飽きることなくしたいものなのだろうか、性行為とは。
教会のプリーストであるマリアンネは処女だ。この道に進むと決めたときから自分の肉体も魂も神のためにあると思っている。そのため彼女は今まで一度も男を知らないし、誰かと関係を持ちたいとも思わなかった。男に抱かれたいと感じる欲の存在さえ知らないと言って良い。
「それで総大司教様。私に何をしろとおっしゃるのです？」

「まずは情報が必要です。相手は一国の王。内部告発があったとはいえ確証もなしに敵対する訳にはいきません。国王コンスタンティンの調査を行い、薬物の存在を確かめてください」

マリアンネは無言で首肯した。

「潜入調査のため姉妹には偽りの身分を用意しました。あなたは今から欠員が出た王宮にメイドとして入ります。王宮のメイドは応募の段階で相応の家格や身の証しを求められることもありますが、なんと今回は年齢二十五歳以下で若く健康な見目の良い女なら誰でも良いとのこと。下半身に獣を飼っているという噂は本当のようですね」

総大司教は最後のほうを呆れと侮蔑混じりに言った。生涯を神の教えに捧げてきた彼女からすると、コンスタンティン王は欲に塗れた俗物の象徴のように見えていることだろう。

「国王の周辺を調査し、彼の評判や人間関係、薬物に関する情報を集めなさい。それと、可能ならば彼と接触する機会を設けて欲しいのです」

「分かりました。謹んで拝命致します」

「よろしくお願いしますね」

マリアンネは大司教に一礼してから退室する。

王国教会最深部の廊下を歩きながら美しき女プリーストは考える。自らに与えられた新

しい任務。なぜ自分が選ばれたか。おそらくは適任だったからだ。
若くて見た目が良くて健康な女。かつ好色な王に襲われても自力で対処できるだけの法術の使い手。
マリアンネは自身の肉欲には鈍感だが、己の肉体が男の肉欲を刺激する自覚はあった。幼いころから教会外に出るたび好色な視線を向けられてきたのだ。自覚しないほうが難しい。
それだけなら私の他にも適任者がいるけど、と彼女が考えたとき、丁度その適任者候補がやって来た。
「お姉さま！」
マリアンネにも引けを取らないグラマラスなボディの持ち主――ベロニカ・コンスタンツェ・ヘラーだった。
コンスタンツェも『摂理の司』に所属するプリーストの一人だ。ピンクの神を腰の辺りまで伸ばしているマリアンネに対し、銀髪を肩に触れるくらいの長さで切っている。
年齢はまだ十九と若いが、さる高僧の血縁者という優秀な血統に違わぬ法力の持ち主で、通常のステップを何段も飛ばして大司教直属の身分となった。マリアンネとは同じ修道院の出身で幼馴染みでもあり親友でもある。コンスタンツェのほうはそれに収まらない秘めやかな感情を抱いているようだが。

「あらコンスタンツェじゃない」
「お久しぶりです。最近は忙しくてお姉さまと会える時間が減って悲しいです」
「可愛いことを言ってくれるわね」
　昔から甘えん坊の妹のようなところがあるコンスタンツェのことを、マリアンネは内心可愛いと思っていた。大人になれば『姉離れ』するかと思ったが、むしろ彼女の妹属性は年々増加傾向にあった。それもこれも幼い頃から一緒に過ごしてきたせいで、お互いの間に築かれた親密すぎる距離感が原因だろう。二人は実の兄弟姉妹よりも互いのことをよく理解していた。
「それでどうしたのかしら？　もしかして、私を心配して様子を見に来てくれたの？」
「もちろんです！　お忙しいお姉さまのことですからきっと無理をなさっているんじゃないかと。お会いできて本当に嬉しいです」
　十代も終わりだというのに少し落ち着きがないコンスタンツェ。今も表情を目まぐるしく変え、全身から喜色を発散させている。そんな彼女を愛おしく思いつつも、マリアンネは本題に入った。
「ところでさっき総大司教様と会っていたのだけど、あなたも聞いた？」
「あの話ですよね」

マリアンネが王の毒牙にかからないか心配してコンスタンツェは顔を歪める。何せ相手は教会の最深部まで噂が届くヤリチン王。麗しのマリアンネお姉さまの貞操が危ないと心配するのも無理はない。王族の手慰み程度に嚙った程度の剣術でマリアンネを手籠めにできるはずはないと思いつつ、万が一を考えると気が気でないのだろう。

コンスタンツェの気持ちを察して、マリアンネはいつも通りに微笑んだ。

「心配しないで。あなたが思うような危険な目には遭わないわ」

「本当ですか？」

不安げに尋ねるコンスタンツェの髪を撫でながら、マリアンネは優しく言った。

「でも、そうね。もしもの時があったらあなたに助けてもらおうかな」

「私なんかでよろしければ喜んでお助けします。何でも言ってください」

姉と慕うマリアンネに頼られた喜びから、コンスタンツェの声音は明るいものになった。

そんな愛らしい妹分の頬をマリアンネは指で突っついた。柔らかな肌だった。

「もしもの時があればお願いね」

※

お城での生活にマリアンネは素速く順応した。掃除や洗濯といった日常の家事は修道院生活で慣れたもの。それらをテキパキとこなし無駄口は叩かない、だからといって無愛想でもない普通の女を演じる。王宮では多くの者が忙しなく動き回っており、いちいち他人を気にしている余裕がないことも好都合だった。

ここに来てみてコンスタンツェではなく自分が任務に選ばれた理由が分かる気がした。彼女は少し落ち着きがない。王宮の使用人としては少し悪目立ちしてしまうかもしれない。それに独断専行で教会の指示を待たず物事を解決してしまおうとする癖があった。

若く才能豊かなコンスタンツェは通常の見習い期間を経ずに『摂理の司』入りした。そのためリスクを慎重に見極める経験や、物事が予定どおりに進まなかったときの次善策を用意する周到さには疎い。そうした若さゆえの情熱と突破力が事件を解決に導いたこともあったが、充分な経験を積んできたマリアンネの目には危なっかしくも映った。

敵地で身分を偽っての潜入調査。これは確かにコンスタンツェより私向きでしょうね、とマリアンネは心中で思う。

たとえば、この城のメイド服ひとつ取っても、もし彼女なら初日に大騒ぎしていただろう。

好色な王の城で働くメイドたちは全員水着に近いデザインのお仕着せを支給されていた。

色こそ白黒の二色で落ち着いてはいるが、布面積の小さいビキニにフリルが付いただけのメイド服は、マリアンネの豊満な肉体を全く隠せていない。下はビキニショーツの上からスカートを履くのだが、これも尻たぶが露出するくらい短い超ミニスカート。床のゴミを拾おうとすれば尻が丸出しになってしまう。

上から九三センチ、五八センチ、八九センチという破壊的なスリーサイズの持ち主であるマリアンネが着れば、何処も彼処も肉がはみ出て大変なことになる。

さらに驚くべきことに下着までもが支給品として用意されていた。この城ではメイド服を脱いでいる時間も王の好みに合わせねばならないらしい。メイドひとりひとりに合わせてメイド長が選定する。マリアンネに渡されたのは純白のブラとショーツの組み合わせ。

ただし、ショーツは股間の切れ込みがえぐいTバックだった。

前はデリケートゾーンの大半が露出する布面積。後ろは尻の割れ目に食い込む紐。

「あなたのような体は下品なのに顔は上品な女には、こういった攻めたものがよく似合うのよ」

メイド長は自分のチョイスに大満足のようだ。こんな衣装を身に着けて働かされる関係上、やはりメイド長と言っても年齢は二十代。マリアンネより数歳上に見える。

彼女はマリアンネに服を渡し、試着するように促した。

「私は他の使用人に仕事を教える立場にあるから、あなたの仕上がりを確認する必要があるの。着て見せてちょうだい」
「分かりました」
ここで問題を起こすわけにはいかないと己に言い聞かせ、マリアンネは素直に着替えた。衝立や更衣室などない。その場で服を脱ぎ、全裸になってからブラジャーを身に付ける。ほとんど紐としか思えないTバックを手に取り足を通した。
「あらピッタリ。やはり私の見立てどおりね」
まるで測ったかのようなサイズだった。どれだけ多くの女の裸を見れば、ここまで正確に目測できるようになるのだろう。
「きっと陛下も気に入ってくださるはずだわ」
メイド長の口調は夢見がちな少女のようだった。ひょっとすると彼女は、この仕事の出来栄えによってコンスタンティン王から『ご褒美』がもらえるのかもしれない。
それがもう一週間前のことである。それから今日まで、マリアンネは毎日昼は卑猥なメイド服を着せられ、夜はルームメイトとお互い規則を破っていないか確認しながら、エロ下着に着替えさせられた。
その間あまり調査のほうは進んでいなかった。まず内部告発者の侍従が見つからないの

だ。彼とは派遣された日に王宮の指定された場所で会う手はずになっていたが、約束の時間になっても現れない。結局、その日は何の収穫もなく終わった。

その後も彼とは接触できていない。

まさか、と良くない想像が頭を過る。既に彼は教会との関係が露見して処刑されてしまったのではないか。そうだとしたら、そこまでして隠したい秘密があるということになる。

（早く国王が魔物と取り引きしている確証を得たいのに……）

あまり長く滞在するつもりはない。潜入調査は期間が長引けばそれだけ正体が露見するリスクは高まる。いくら気を張っていても人間の体力も集中力も無限ではないからだ。ふとした弾みで本当の身分に繋がる手がかりを漏らしてしまいかねない。

ミスに繋がるような焦りは持たず、それでいて可能な限り短期集中で結果を出す。そう考えていたマリアンネに突破口が開けたのは今朝のこと。今日は仕事を普段よりも早めに終え国王の部屋に来るよう言われたのである。

「これは大変名誉なことなのですよ。あなたも陛下に抱いていただければ分かります。女という生き物はすべて、あの方に愛していただくために生を受けたのだと」

そう力説するメイド長や羨ましそうに見てくる同僚メイドに冷やかされつつ朝からの仕事を終えると、まだ陽が沈みきってないうちからマリアンネは湯を使わされた。汗と埃に

まみれた体で陛下の寝所に入るなど失礼とメイド長に指示されてのことだ。
湯から上がるとメイド長が直々にマリアンネを国王の部屋まで案内した。まだ新人メイドの身では、王族が住むエリアまで足を踏み入れたことがなかったのだ。
「ここからはマリアンネだけが入れます。くれぐれも失礼のないように。あなたは身を任せているだけでいいですからね。あとは陛下が万事よくしてくださいます」
自分の時を思いだしているのか、メイド長の頬が微かに上気していた。
マリアンネはドアの前で深く息を吸って吐く。このドアの向こうに魔物との関係を示す秘密が隠されているかもしれない。それを暴くために自分はやって来たのだ。朝から周りの目が集中したため、王宮の外にいる連絡係と接触することができなかった。よしんば接触できたとしても、総大司教の指示は間に合わなかっただろうが。
「失礼いたします」
ノックして部屋に入る。部屋の中央に置かれた天蓋付きのベッドが目に入った。ベッドの上に誰かが座っているのが見えた。
「来たか。こっちにおいで」
若い男の声。察するにコンスタンティン王本人。手招きされて近寄ると、王は待ちきれないとばかりにマリアンネの腕を掴んで抱き寄せた。

「きゃっ！」

突然のことでバランスを崩し、そのまま彼の腕の中に倒れ込む。胸板に顔を埋めるような体勢になる。慌てて離れようとするが、裸の胸にがっちりと抱きしめられていて抜け出せない。

「会いたかったぞマリアンネ。新しいメイドは美しいと聞いていたが評判に相違ないな」

王が耳元で囁いた。ぞくり、背筋が震えた。驚くべきことだが、至近距離で聞く男の低い声に、マリアンネの心は強く惹きつけられた。

（流されてはダメ！）

必死に自分を叱咤する。私の肉体は神に捧げたもの。たとえ任務であっても男性に穢される訳にはいかない。頭ではそう考えているのに王の手で体を撫で回され、耳元で囁かれると体は言うことを聞かない。乳房を押しつけるように男に抱きついてしまう。

（これが魔物と取り引きして得た能力（ちから）だというの。こんなことのために……）

だとするなら余計にマリアンネは負けられない。彼とセックスすることは魔物の支配に屈したことになってしまう。

彼を突き放さなければ。そうしたら城にはいられなくなってしまうだろうが仕方ない。今日で調査は終了だ。総大司教には、コンスタンティン王は女性を従わせる不思議な術を使

うと報告し、教会から正式に審問官を派遣してもらうのだ。
マリアンネは法力を全身に漲らせようとする。聖なる力を己の身に通すことで彼女は身体能力が大幅に強化される。それによって熟練の戦士とも遜色ない戦闘力を手に入れられるのだ。
――しかし。
（法力を感じない。まさか力を封じられてる！）
今まで何度も危機を乗り越えてきた経験則から、自分の身に何か起きていることを悟る。この部屋には超常の能力に類する力を封印する結界が張られているのだろう。暗殺者対策だろうか。これは致命的な失敗だった。だが、もはや取り返しがつかない。
「抵抗しても無駄だ。俺の許可なくこの部屋から出ることはできない」
「くっ、離しなさい！」
マリアンネは渾身の力を込めて抵抗する。だが法力の使えない彼女は女性の平均値並みな腕力。いくら暴れても男の腕から逃れることはできない。それどころか男は軽々とマリアンネの体を持ち上げ、お姫様抱っこのような状態で自分の膝に乗せてしまう。そして片手で彼女の背中を支えつつ、空いた片方の手で胸を揉んだ。
「あんっ♡」

思わず甘い声が漏れてしまう。男が我が意を得たりと笑ったのが分かった。恥ずかしくて顔が真っ赤になる。

「いい反応だな。もっと可愛い声を聞かせてくれ」

「誰が、あっ、ん、あん、あ、や、やめ、んっ、ひぅ、ああっ♡」

反抗的な言葉を口にしながら同時に喘ぎ声を漏らすマリアンネを見て、男はますます興奮を高めるようだった。

「こっちを向け」

それまで顔を背けていた女に王が言った。

恐る恐るマリアンネは顔を上げる。目の前に男の顔があった。端正な顔立ちをした青年である。髪は金。獅子の鬣のように波打つ金髪はカーテンを閉め切り、燭台の灯りを頼りにする薄暗い部屋でも目を打つ目映さだった。目を合わせれば翠玉の瞳がこちらをじっと見ている。

放蕩者と聞いていたが国王という立場は気苦労が絶えないのか、その眼差しはどこか達観した印象を受ける。それでいて瞳の奥には少年のような輝きが見て取れた。

（なんて素敵な人……）

不覚にも胸がときめいてしまった自分に驚く。男性の容姿に目を奪われるなどマリアン

ネは初めての経験だった。
（いけない、私はこの男の正体を確かめるために来たのだ。気をしっかり保つようにしなければ）
気を引き締めたプリーストの頬を疑惑の国王が撫でる。
「お前は本当に美しい女だ。こうして間近で見ると、なおさらそう思う」
そう言って彼は顔を近づけてくる。キスされると思い、反射的に顔を背けそうになるが、なんとか踏みとどまった。ここで拒絶すれば怪しまれる恐れがある。彼は私のことをただのメイドだと思っている。だったらそれを利用して今は脱出の機会を探らねば。マリアンネは目を固く閉じ、心の中で主に懺悔しながら男のキスを受け入れる。
暗闇の中。すぐに柔らかな感触が唇に伝わってきた。最初は軽く触れるだけのキス。顎に手を添えられ、何度か角度を変えて啄むような口づけを繰り返す。
「ちゅっ、ちゅ、れろ、んん、ふぁ、んんっ、ちゅ、ちゅう、ん、んんん……」
そのうちに舌先で唇を突かれたので、こちらも舌を伸ばして迎え入れてやると、あっという間に絡み合うようなディープキスに変わる。唾液を流し込まれると、頭が痺れて何も考えられなくなってしまう。舌を吸われて甘噛みされると、下半身がきゅんっと切なくなった。
（なにこれ、すごく気持ちいい……）

まるで自分が自分でなくなるような感覚に陥る。頭の中が真っ白になって、何も考えられなくなる。ただ目の前の男のことだけしか考えられない。気づけば自分から彼の背中に腕を回していた。

彼の逞しい腕がマリアンネを抱きしめて、分厚い胸板が豊かなおっぱいを押し潰す。彼の体温を感じるだけで幸せすぎて涙が出そうになってしまう。このままずっと抱き合っていたいと思ってしまうほど、彼との触れ合いはとても心地よかった。

「どうだ、初めての接吻の味は？」

唇が離れてようやく一息つくことができたマリアンネに、王が意地悪く訊ねてくる。

「どうして私が初めてだと？」

「そんなに緊張していては童貞でもなければ分かる」

女の経験のなさを見透かした国王は余裕の笑みを浮かべた。

「もっと楽にしていろ。俺に全て任せろ。余計なことを考える隙もなくなるまで可愛がってやる」

王の大きな手がマリアンネの乳房を掴んだ。ぐにゅり、と男の大きな手の中で乳房が潰れ、指が食い込む。痛みよりも快感が勝って、思わず喘ぎを漏らしてしまう。

「あんっ、んぅ、くぅ、あ、ああっ、ひ、ひあっ」

如何にマリアンネが魔物との戦闘では経験豊富なプリーストだろうと、男女の睦みごとにおいては素人だ。一生涯経験することなどないと思っていた。それなのに今、男の腕に抱かれ、彼に体を自由にされている。

相手は絶世の美男子で、ベッドの上で抱き合いながら愛の言葉を囁かれると、つい身を委ねてしまいそうになってしまう。

（だめよ、惑わされてはダメ！　この男は女を籠絡することに慣れているのよ。私みたいな経験のない女を籠絡することに慣れているだけ。それにさっきからおかしいわ。私の体がまるでコンスタンティン王に抱かれることを望んでいるみたいな。魔物との取り引きで得た能力を駆使しているに違いない！）

自分に言い聞かせることで、かろうじて理性を保つことができている。だが、それもいつまで続くか。

「胸が大きいだけでなく、感度もいいようだな。ほら、乳首がこんなに硬くなっているぞ」

「やっ、そんなこと言わないでっ、あぁっ、いやぁっ、ひっ、あっ、あんっ、ひゃぅんっ、ふわぁあぁぁ！」

（だめぇ！）

まだ彼に横抱きにされ、胸を揉まれているだけ。セックスの手順としては入り口も入り

口なのだが、もう既にマリアンネの頭の中では、彼に最後までリードしてもらうことしか考えられなくなっていた。

（こんな……こんなことって……）

真面目なプリーストは初めて味わう快感に混乱していた。自分がこれほどまでに感じやすいとは知らなかった。まさか神に仕える身がこれほど淫蕩な本性を隠し持っていたとは。生涯知りたくもなかった。

「んっ……あぁ……」

快楽に翻弄され彼の腕の中で悶えた。全身から力が抜け、頭の中までトロけてしまう。マリアンネの瞳からは涙が流れ落ちていた。嬉しくて泣いているのか、それとも悔しくて泣いているのか自分でもよくわからない。生まれて初めて味わう不思議な感覚に頭が混乱する。

そんなマリアンネを見て、コンスタンティンは「やはり可愛いな」と呟き、深いキスを再開した。

「んっ……ふぅううん……んちゅ、くぷ、んちゅう、ぢゅる、れりゅう♡」

そのまま、二人は舌を絡め合う濃厚な口づけを交わし、唾液を交換し合った。互いの口腔内に溜まった唾を飲み込み、相手の体液を取り込んでいく。キスだけで脳髄が痺れそうなほどの快感を感じてしまう。

子宮の奥がきゅんきゅんと疼いた。自分の体が目の前の男性を求めていることを自覚してしまう。それでもマリアンネはすぐに気を引き締めなおす。魔物と取り引きして得た能力に教会の聖書者が屈してはならない。

（この窮地を脱して逃げるのよマリアンネ。隙を見て彼の腕から抜け出しなさい。部屋から出さえすれば法力が使えるはず）

そんなことを考えている間にも、胸を揉んでいた彼の手が女体を滑り降り、下半身に狙いを変えていた。

股間からは愛液が溢れ出している。既にビキニパンツどころかシーツまで濡らしていた。割れ目に指先を這わせられるだけで快感が走る。マリアンネは無意識のうちに腰を動かしてしまいそうになり、慌てて歯を食いしばる。

（ダメよ……我慢しないと……）

そう思うのだが、体は言うことを聞いてくれない。まるで主人の命令を無視する犬のように、勝手に快楽を求めて動き続ける。

「うぅ……あぁ……んっ♡　はぁぁ……あんっ♡」

「どうだ俺のテクは。気持ちいいだろう？」

マリアンネは答えられないでいた。素直に言ってしまえば、我を忘れそうになるほど気

持ちが良い、しかし、そんなことを言えば、自分が彼の虜になっていることを認めることになる。それだけは絶対にできない。

「黙っていては分からない。ちゃんと言葉で言え」

マリアンネの心を読んだかのように、コンスタンティン王は耳元で囁く。その声すらマリアンネを狂わせる媚薬となる。

「んっ……あぁ……はぁ……んんっ……そ、それは……」

「教会のプリーストと言えど体は普通の女と変わらないんだ。余程の不感症でもなければ堪えがたい快感だろう?」

なぜそれを、と思わずマリアンネは声に出して問い質しそうになる。

「どうして俺がお前の本当の身分を知っているか不思議そうな顔だな。答えは単純だ。俺が教会に情報を流して、お前をおびき寄せたからだよ。情報提供者に会えなくて難渋しただろ。当然だ。そんな侍従は最初から存在しないんだからな」

「なぜそんなことを」

「大した理由はない。教会の聖職者というやつを抱いてみたかっただけさ」

「そんな……」

たったそれだけの理由で彼は罠を張ったのか。教会を敵に回すことも厭わずに。

「だがまさか、ここまで俺好みの女が派遣されてくるとはな。俺の噂やメイド募集の話を聞けば、俺に気に入られそうな女を寄越してくることは予想できた。だがマリアンネ、お前は……」

王の手が手中に収めた女プリーストの秘所を素速く摩擦する。

「くぅ……あ……あぁっ、ひあっ、あぁっ、あっ、ひぃいいいいんっ！」

「顔、体、声、気持ち良くしてやったときの反応。すべてが俺の理想どおり。俺の妄想を希代の美術家に依頼し、具現化してもらったかの如き理想像だ。お前こそ俺の女神だマリアンネ」

背中を支えていた手が女プリーストの体を抱き直す。抱きしめたまま手は大きな肉球を揉みしだいた。反対の手はビキニパンツの脇から入り、ぬかるみ始めていた姫割れをこじ開ける。

「く、くぅぅぅん♡　こ、こんなことして、私は屈しない。屈しませんっ♡　わ、わたしはっ、ぜったいにぃ――あひんっ♡」

言葉とは裏腹に膣奥から大量の蜜液が分泌された。濡れた粘膜が男根を求めるようにヒクついている。指が二本挿入され掻き回されるとマリアンネは簡単に絶頂した。

絶頂直後の敏感すぎる陰唇に男の指が容赦なく出入りした。

「くぅううんっ♡　ひぁあぁぁっ！　やらぁあああっ！　らめぇぇぇっ！」

絶頂したばかりの性器を乱暴に弄られてマリアンネは泣き叫んだ。快感が強すぎて辛い。なのにもっともっとして欲しい。彼女は自分でも震撼するほど激しい性欲に突き動かされている。

もしコンスタンティン王が魔物と取り引きしている話自体が嘘だとしたら、こうして彼に愛撫され悦んでいるマリアンネは、隠してきた女の浅ましい本性をイケメンの手慣れたセックスで引き出されているだけになる。

それは魔物の貸し与えた力に屈する以上に受け入れがたい事実だった。

だから必死に耐えようとする。

（だめ、感じてはダメなのに）

貞淑な女プリーストは懸命に理性で欲望を押さえ込もうとする。そんな努力も虚しく、体は着々と彼を受け入れようとしていた。

「もう準備万端じゃないか。そんなに期待しているのか。こんなに濡れるとは思わなかった。これだけ濡らせば十分だろ」

そう言うと、男はマリアンネをベッドに押し倒した。

「これは必要ないかと思うが、せっかく用意したし使っておくか」

コンスタンティンは枕の下から、しっかり栓がされた小瓶を取り出す。彼が軽く手を振ると小瓶の中でピンク色の液体が揺れた。
「それはなんですか」
「強力な催淫剤だ。これを使えば、どんな女も淫乱になるぞ」
「まさか！　普段からそんなものを使って女性たちを陵辱しているのですか。だとしたら私は軽蔑します」
「勘違いするな。こんな物を使うのはマリアンネが初めてだ。他の女は俺が抱いてやると言えば、喜んで自分から脱ぎだすからな。だがしかし、お前だけは確実に俺のものにしたかった。だから、こんな俺らしくもない、道具の力に頼ることにした訳だ。媚薬なんて本当は俺も使いたくないんだ。俺本来のやり方はもっとスマートなんだがな」
そう言うと、王はマリアンネの両足を開かせ、その間に自分の身体を割り込ませた。
「マリアンネ。お前が俺のモノになった暁には、大陸全土だってプレゼントしてやる。欲しいものはなんでも与えてやる」
コンスタンティンは小瓶の栓を開く。媚薬を垂らした指先でクリトリスに触れてきた。
「くぅうんっ♡」
瞬間、電流のような快感が走り、マリアンネは身悶える。

そのまま王は勃起した陰核を執拗に責め始めた。指で摘んで引っ張ったり、押し潰したり、捻りを加えたりする。

「んんっ♡　あふぅ……んんっ♡　んんん～っ♡　んふぅっ♡」

マリアンネは腰を振りたくって悶えた。快楽に負けまいと耐えるのだが、抵抗すればするほどに官能は増していく。

「んんっ♡　はぁ……ああっ、あぁ……んっ♡　はぁ……あぁ……んっ♡」

マリアンネは声を押し殺そうとするが、どうしても漏れてしまう。

「どうだ。気持ちいいだろう。これが俺のテクニックだ。女なら誰でも腰砕けにしてやる。お前みたいに淫乱な肉体を理性で抑えていたタイプは特にな」

（ダメ……我慢できない……気持ち良過ぎる……こんな……）

マリアンネは媚薬の効果に抗えず、早くも腰を振っていた。無意識のうちに男を求めているのだ。

（ダメよマリアンネ。そんなことしちゃダメ）

心では拒絶するが、体は言うことを聞いてくれない。マリアンネは腰を浮かせると、自ら股間を押し付けるようにして擦った。

「良い反応だ。可愛い奴だな。素直になれよ。お前は俺に抱かれるために生まれてきたんだ」

「そ、そんなこと……誰が……あなたなんかの……んんっ♡」
「本当に強情だな。まぁいいさ。時間はたっぷりある」
王はマリアンネの股間に顔を近づけた。
「んんっ♡」
秘所を嗅がれ、マリアンネは身を捩った。
「凄い匂いだ。興奮してたな」
王はマリアンネの肉芽を舌で転がす。
「あぁんっ♡」
舌を根本から先端まで広く使い、ねっとり舐めしゃぶられるときも、尖らせた舌先で勃起した花芽をピンピンと弾かれるときも、マリアンネは甘い声を上げて悦びに震えた。神に仕えるはずの自分の体が性的な刺激に弱く感じやすい体質なのか、それとも媚薬のせいで感度が上がっているのか、経験のない女プリーストには分からない。ともかく秘所の割れ目はしきりに開閉して、愛液の雫を大量に分泌していた。それを王は指で掬い取って、マリアンネの膣内へ塗り込んでいく。膣内の壁は熱っぽく潤んでいた。指を挿入されると、まるで歓迎するように柔らかく締めつけてしまう。
（なにこの感覚。おかしい。私の体、変になってしまったの？）

なにも分からず、ただ手慣れた男の愛撫で喘がされ戸惑うだけの肉人形になってしまったが、その戸惑いすらすぐに快楽に上書きされてしまう。

「ひぅううんっ♡　そこぉっ♡　あっ♡　あっ♡　あっ♡　あぁああっ♡」

男の長い指が根本まで挿入される。彼の指先がマリアンネの奥にあるコリコリとした部分を捉えた。

「ここが良いのか？」

「そんなことはありません！　私は神の僕ですっ。このような破廉恥なことっ」

そうは言うのだが、子宮口を指先で弄ばれるたび、マリアンネは背筋を仰け反らせて悦楽に浸る。

「すっかり出来上がってるじゃないか」

「こんなの……違いますっ」

マリアンネの声は弱々しくかすれていた。

教会に所属する聖職者の自分が、任務とは言え肌をほとんど隠せない破廉恥な衣装を着せられているだけでも罪深いのに、そのうえ男性と淫らな行為に及ぶなんて。彼女の心は罪悪感で一杯だった。

「何が違うんだ？　こんなに濡らしているじゃないか」

「それは薬のせいで……」
「それだけじゃないだろ。薬を使う前から俺に抱かれたそうな顔してたじゃないか」
「そんなことは……」
ないと断言できない。去勢を張る余裕さえ快楽に塗りつぶされていく。
「一度イカせてやる。そうすれば少しは素直に認められるようになるな」
コンスタンティン王の指が膣洞から引き抜かれる。変わって彼は舌を捻じ込んできた。熱く、濡れていて、肉厚で、巣穴に潜り込む蛇のように身をくねらせて女の聖なる穴に入って来る。
(舌がっ。こんなにいやらしい動き。それに長くて奥まで入ってくる。指もだったけど全部が大きい)
女とは違う男の体。マリアンネも女性にしては高めの身長だが、コンスタンティンが腕を広げれば丁度すっぽり収まってしまう。彼に抱きしめられながら愛され、可愛がられ、気持ち良くされ、女の幸せを教え込まれるのに最適なサイズ差に感じた。
(なにを馬鹿なことを。弱気になってはいけない。私は教会のプリースト。神に使える者。こんな男に屈服するわけにはいかない)
そう思いながらもマリアンネは彼にされるがままになっていた。だいたい女体の最も秘

められた場所に指だけでなく舌の侵入まで許し、好き放題に舐られている状況でなにを格好つけているのかと自嘲にも似た気持ちが湧いてくる。

そうしていると彼の両手がマリアンネの豊満な乳房に伸びてくる。クンニしたまま胸を揉まれた。彼の高い鼻先がクリトリスを刺激すると同時に乳首も転がされる。

「ふぁぁぁっ！　ああっ、いっ……やぁ、だめ、そんなところまで……ひゃん♡　何カ所も同時になんて♡　はぁぅ、あ、そこ、そこはだめぇ、はぅん♡」

だんだん頭がぼうっとしてきた。

（ああ、私いま何をされているの？）

思考がまとまらない。理性が失われていくのが分かる。それでも辛うじて残った理性をかき集めて、マリアンネは必死に抵抗しようとした。

だが、その抗いも虚しく、コンスタンティンが乳首をキュッと摘まみ上げると、彼女は容易く達してしまった。

「ひぃゃ、あああん、あぁ、ん」

総大司教直属のプリースト。これまで魔物による事件を数多く解決してきた教会のエキスパート。そんな肩書きや実績は何の役にも立たない。服を脱いだ男と女がベッドの上でする事に関して、マリアンネはティーンエイジの娘っ子にも劣る。それほどまでに未熟で

経験不足だった。
「さて、そろそろメインディッシュに入るか」
絶頂の余韻に浸る間もなく、コンスタンティンの手がマリアンネの足の間に伸びる。ぐしょ濡れになっているショーツの上から割れ目を撫で上げられただけで、腰が浮き上がるほど感じてしまう。
「んんっ♡」
（もうダメ……これ以上されたら……）
頭では分かっているのに抵抗できない。心は屈してない。だが体は屈している。それが悔しい。悔しくて堪らない。でもそれ以上に気持ちいいのだ。もっとして欲しいと思ってしまう。
「はぁ……あぁ……んんっ♡」
「まだ始まったばかりだぞ。今からそんなに蕩けていてどうする」
王はマリアンネの腰を持ち上げ、下着をスカートごと脱がせる。お飾り程度のスカートでも男の手で脱がされるとなれば別だ。彼の目に私の全てがさらけ出されていると思うと急に心細くなった。
羞恥を覚えるよりも先に、熱い塊が押し当てられるのを感じた。見なくても分かる。彼の

剛剣だ。マリアンネは処女だが勃起した男根を見る経験はあった。魔物に操られ性衝動を刺激された男に襲われたことがあったのだ。そのときは法力が使えたので難を逃れた。記憶の中にある男根を目の前の屹立に重ね合わせる。

「おおきぃ……」

言ってしまってから気づいた。ハッと目を見開くがもう襲い。マリアンネの陶然とした呟きを聞いた王は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。そこを男性自身とか俺の分身とか男のシンボルとか呼ぶくらいだから、きっと男性は生殖器を褒められることと自尊心が結びついているのだろう。

彼を調子に乗らせてしまったと後悔しても後の祭り。男としての自信を満たした彼が腰を進めてくる。

「んんぅっ！」

亀頭の先端がマリアンネの中に入ってきた。まだほんの先っぽだけだと言うのに苦しいほどの圧迫感を感じる。

「力を抜けマリアンネ。力んでいては俺のモノは入らないぞ」

「くっ……うう」

マリアンネは歯を食い縛って耐えるが、痛みのせいか上手く力が抜けない。そんな彼女

を見て王は溜息をつく。
「仕方ない奴だ」
そう言うと彼は痛みに悶える女プリーストを抱き起こし、自分の膝の上に座らせた。対面座位の姿勢である。
「これでどうだ？」
「うぁあんっ！　あぁぁっ！　あああっ！　そんなっ！　お腹の奥までっ！　壊れちゃうっ！　いやぁっ！　許してぇっ！」
王のイチモツはマリアンネ自身の体重で彼女のナカに収まっていく。脚を踏ん張り、腰が落ちないように堪えようとするのだが、王の手に脇腹や背中を撫でられたり、ブラをめくり上げた先にある乳突起を吸われたりすると体から力が抜けてしまう。
「こうすれば少しは気が紛れるだろう？」
「うっ……くぅ……あっ……やめてっ」
口で拒絶するが、敏感な部分を弄られるたびに甘い吐息を漏らし、少しずつ彼の肉棒を受け入れてしまう。そしてついに彼の先端が最奥に到達した。行き止まりにコツンと当たった瞬間、マリアンネの全身に痺れるような快感が走る。
「ああ――――ッ！」

対面座位で密着した女を王は力強く抱き寄せる。まだ破瓜の痛みと熱が残る下半身は動かさない。その代わり上半身では至るところに彼の唇や舌が這ってきた。挿入の苦痛で浮いた球の汗を彼に舐め取られる。白い胸に赤い痕が残るまで吸い付かれた。腕を上げさせられたかと思うと彼の舌が横乳と腋の間を肋骨に沿ってなぞるように往復する。

「あっ、あふっ、あんっ、ああ――――♡」

そうやって時間をかけて体を繋げているうちにマリアンネの肉筒が男の形に合わせて変化する。最初はキツく閉じていた膣壁も今は柔らかく解れ、男の怒張がスムーズに出入りするようになっていた。

「少し動かすぞ。無理なら言え。時間はたっぷりあるんだから焦る必要はない」

ゆるゆるとこちらの反応を窺うように王の腰は動く。濡れた媚肉を硬いイチモツで擦られる初めての体験。マリアンネは下腹部から迫り上がってきて脳を冒す未知の悦楽に襲われた。

「んっ♡　ふぅっ♡　ふぁぁ♡　はぁ♡　ああん♡　ふぁ♡　あ♡　ああっ♡　お腹の奥っ♡　ジンジンしますっ♡　あん♡　ああっ♡　だめっ♡　もうっ♡　おかしくなっちゃうっ♡♡」

王の心配は杞憂だった。

もはやマリアンネの体は完全に出来上がっていた。コンスタンティンの巨根がゆっくりと引き抜かれると、まるで行かないでと縋るかのように粘膜が絡みつき、押し込まれれば歓迎するように愛液が溢れ出す。彼の肉茎が動くたびジュブジュブと卑猥な水音が立った。

それでもなお王の動きには余裕があった。激しく責め立てず、じっくりと腰をグラインドさせて女の反応を伺っている。少しでも反応がいい部分を重点的に攻めて弱点を探るつもりのようだ。

男がストロークを大きくしていくにつれて、マリアンネの反応も大きくなっていった。次第に声は艶を帯びて切なげになっていく。それが恥ずかしくて口を噤もうとすれば、隠そうとしても無駄だとばかりに子宮口を突かれて悲鳴が漏れる。

長髪を振り乱し、乳房を揺らしながら快楽に喘ぐ。

これは自分が望んでいることではない。断じて違う。今の私は無理やり犯されているのだ。己に言い聞かせる。

だというのに――。

（ああっ♡　こんなっ♡　ダメなのに♡）

「気持ちいいだろマリアンネ。俺はお前に最上級のものしか与えない。最上級の暮らし、最上級の快楽……最上級の男。苦痛なんて一瞬も与えるものか。だから諦めて俺のものにな

れ」
「んっ♡　ふっ♡　くっ♡　ふぅぅっ♡」
（こんなっ♡　悔しいっ♡）
心の中では抵抗しているはずなのに、体はどんどん淫らに乱れていく。彼と繋がっている場所から次々と新しい蜜が流れ出て止まらない。体が熱い。心臓がドキドキしている。呼吸が激しくなる。頭がクラクラする。全身の感覚が鋭敏になり、特に股間への刺激が強く感じられるようになる。膣内を掻き回され、Gスポットを集中的に擦り上げられると、今まで感じたことのないような激しい愉悦が襲ってくるのだ。
頬に手を添えられたかと思うと、彼にキスされた。彼の舌が唇を突いてくる。開けろと命令されて逆らえない。舌と舌が絡み合う。彼の唾液を飲まされた。彼もマリアンネの唾液を飲みたがった。
舌を絡め合わせ、互いの口腔内を貪りあう。上でも下でも繋がる男女。その交わりは激しさを増すばかりだ。
「そろそろ限界だ……一緒にイクぞ」
「いや……それだけは……お許しください……どうか……中だけは……」
弱々しく首を振るが、願いを聞き届けられることはなかった。

コンスタンティンは抱え上げていたマリアンネの体をベッドに下ろす。対面座位から正常位に切り替えると女の柳腰を両手で掴まえる。がっちり押さえ込んで衝撃が逃げないようにしてから――フルピッチで本気の抽送を叩き込んできた。

「んあああッ♡　だめえええっ！　やめ、やめて……やめてえええっ！　ひぎっ……ひぐうう……ひぐうう……っ♡」

その腰振りの激しさにマリアンネは、どれほどコンスタンティンが手加減してくれていたか思い知る。先ほどまでは処女を失ったばかりの女の体を気遣い、もどかしい動きしかしていなかったのだ。しかし今は、マリアンネの体が抽送の衝撃や彼の肉茎の大きさに慣れ始めている。なにより彼自身も射精したくて歯止めが利かなくなっていた。

凄まじい勢いで肉棒を突き込まれ、そのたびにマリアンネの口から絶叫が上がる。最初の一突きごとに理性が崩壊していくようだ。

「ひゃあああうっ♡♡　ひっ！　ひぃいいいっ♡♡♡」

あまりの快感と悦びに泣きじゃくりながらも、彼女は完全に感じ入っていた。雌悦とは無縁だったはずの女プリーストは、男に抱かれる女の幸せを知ってしまった。それは彼女の心と体に刻まれた紛れもない事実。

肌と肌がぶつかり合い、結合部から淫らな音が響く。巨大な剛直で何度も貫かれた秘裂

からは大量の愛液が流れ出す。
マリアンネは己の左右に置かれたコンスタンティンの腕を掴んだ。縋りついたと言ったほうが適切かもしれない。そうしていなければ正気を保てず、恐ろしいほど猥りな言葉を口に出してしまいそうだった。
「全身が震えているぞ。もうイキたいんだな。俺もだ」
マリアンネはコクコクと首を縦に振って肯定する。もう我慢できない。早くイカせてほしい。
コンスタンティンが体を倒し、マリアンネに覆い被さってきた。絶頂の予感に怯える女を安心させようとしているのか抱きしめられる。細やかな気遣いを見せる一方で、彼の動きはますます容赦ないものに変わる。律動は速くなり、そして大きくなっていく。
マリアンネは男の肩に顔を埋めて、ただひたすらに喘ぎ続けた。もう何も考えられない。思考能力が完全に奪われてしまった。彼の動きに合わせて腰が勝手に動いてしまう。
やがて男の肉茎がひときわ膨らんで脈動した。そして熱い精汁が膣奥に向けて放出され始める。
（あぁあああっ♡）
子宮口に白濁をかけられた瞬間、マリアンネは絶頂していた。これまで味わったことがな

いような凄まじいアクメだった。まるで全身の血が沸騰しているかのように熱くなり、脳髄まで痺れてしまうほどの快美感。

激しいピストン運動によって結合部から泡立った愛液が溢れ出し、シーツの上に滴り落ちていく。大量のザーメンを飲み込んだヴァギナは限界を超えて広がりきり、もはや閉じることを忘れてしまっていた。男根が出入りするたびに捲れ上がってしまっている。

だが、それでもなお、コンスタンティンは止まらなかった。マリアンネの中で果ててもまだ硬度を保っているペニスを動かし続ける。そしてついには、再び射精してしまうのだ。

そのあまりにも強烈な快楽を前にして、マリアンネは失神寸前になっていた。何度も何度も連続でイカされているというのに、さらにまた新たな絶頂を迎えようとしている。こんなことは生まれて初めてのことだった。

彼は底なしだった。まるで疲れや萎えという言葉を知らない生物かのように、マリアンネの膣内で射精しながらも休まず動き続ける。膣内の至る場所に彼の子種を塗り込まれてしまった。

やがて何度目かの射精を感じたとき、ふっとマリアンネの意識は風に煽られたロウソクが消えるように消失した。

※

初めてコンスタンティンに抱かれた日以来、マリアンネの扱いは一変した。それまで王宮に勤める一介のメイドに過ぎなかった彼女は、まるで彼の正妃にでもなったかのような待遇を受ける。

食べ物でもドレスでも装飾品でも、王は初めての日に約束したとおり最上級品ばかりを取り寄せた。しかし、そのような贅沢三昧はマリアンネの心を頑固にするばかりだった。

「このような放蕩三昧はおやめください。欲に支配された心に魔物は容易く入り込んできます。国王陛下は民の模範となるべき御方です。それなのに……」

「俺に縋りついて何度も悦びながら絶頂した女の言葉とは思えんな。あの時のお前は欲に支配されていなかったとでも？」

マリアンネは顔を赤らめて俯く。反論できるはずがなかった。確かにマリアンネはコンスタンティンとの性交で女としての悦楽を知ったのだ。

コンスタンティンはマリアンネの顎を持ち上げて強引に目を合わせる。

そのままキスをされる。避けなければと思うのに体は自分から彼を迎えに行ってしまう。軽く突き出した唇に彼の唇が触れる。

「そんなに嫌なら俺から逃げてみるか」

逃げられるものならな、と挑発する響きが込められていた。寝室には常に侍女が侍りマリアンネの世話を焼く。彼女は逃亡や自殺防止の役割も兼ねているのだろう。

部屋の外にも常に見張りの兵士が立っていた。法力の使えないマリアンネでは、王宮の最深部を任される腕利きの兵士を倒すことなど不可能だ。

風呂やトイレも含め身の回りに必要なものは全て寝室内に揃っているため、何らかの口実で部屋の外に出ることも叶わない。一度だけ腹痛を訴えてみたがベッドに寝かされ御殿医の診察を受けた。

ここでの暮らしは本当に至れり尽くせりなのだ。部屋の外に出る自由がないことさえ除けば。

コンスタンティン王は決して悪い人間ではなかった。少なくともマリアンネに対しては誠実に接してくれているように思えた。しかし、だからこそ恐ろしい。いったいどうしてここまで自分に執着するのか理解ができないからだ。

夜が来ると今日も彼にベッドに連れ込まれた。

裸に剥かれて全身を愛撫されたあと、背後から抱き締められる形で挿入された。乳房を強く揉まれながら抽送されると、たちまちマリアンネの蜜壺はヒクつき、自分を女に変え

た肉棒に甘え出す。
「は……っんぅ、だめ、こんなかっこ……で」
背面側位で片脚を彼の体に掛けさせられる。大きく開かされた脚の中心では、彼の太い男根が潤んだ雌穴を数え切れないほど犯していた。
「あん、あんっ、ああっ、すご、っ……い、や、ああ……っ」
「この体勢でクリトリスを撫でられながら浅いところを擦られるのが好きだろ」
「んっ！　やっ、だめっ、だめなのにぃっ、は、は、っう、ああっ」
もう知られてしまっている。自慰もしたことないマリアンネ自身よりも、マリアンネの肉体の扱い方をコンスタンティンは熟知していた。弱い場所を探り当てられ、そこを徹底的に責められるとあっという間に昇り詰めてしまうのだ。甘い悲鳴を上げてのけぞった瞬間を狙って男は腰を突き上げてきた。
それまでよりもひときわ深い場所――子宮口をノックされて頭の中が真っ白になる。
呆然としていると耳元で囁かれた。
「お前が好きな体位だぞ。このままもう一度イケるな？」
そう言うと抽送を再開する。達したばかりの敏感な肉壁を容赦なく擦り上げられた。強すぎる快感に泣き叫んでしまう。これ以上されたらおかしくなってしまう。なのに――気

持ちよすぎてたまらない――。
「んひいいっ♡　あああっ♡　おくっ♡　ふかいぃっ♡　あひいいいいっ♡」
「お前の大好きなGスポ責めだ」
連続でイカせられると胸が苦しくなってしまう。一度休ませてくれと懇願しても許してもらえなかった。それどころかますます激しくなる一方だ。
「イキっぱなしになって可愛いぞ」
「ひゃめえぇっ♡　いま動かれたらぁっ♡　わたしのからだこわれりゅうっ♡」
絶頂直後の膣内をかき回されるなんて拷問に等しい行為だった。身体中が痙攣して止まらない。涙とよだれまみれの顔を舐められて意識を取り戻す。舌を差し出すとねっとりと絡みつかれる。口の中まで犯されている。
快楽に塗れ弱った姿を愛されていると、この人の前では弱い私でいいんだ、と思ってしまう。
「あーっ、イクッ、またイッちゃぅっ！」
「好きなだけイけばいいだろう？　もっと感じてみせろ」
「ひいっ、あ、いくっ♡　またいっちゃううっ♡　んおおおっ♡」
背面即位からベッドに倒され四つん這いに移行する。後背位で後ろからヒップを鷲づか

みにされると、膣奥を叩きつぶすような激しい抽送の連打が乱れ飛ぶ。
　そのままぐちゅぐちゅと激しい音を立てて掻き回されれば意識が遠のく。目の前の男のことしか考えられなくなる。
「あぁ……すごいですぅっ♡　おっきいおちんぽ気持ちいいぃっ♡　しゅごいっ♡　ゴリゴリッてぇ♡　ひっ！　きゃあああぁあっ♡」
「こっちもいい具合だッ！」
　亀頭をポルチオに押しつけられる。刺激の強さに気が狂ってしまいそうになる。その状態でグラインドされるものだから堪らない。息ができないほどの快楽だった。
「いぎゅうぅぅっ♡　イキますっ♡　またイクゥウウッ♡　はげしいのおおおおっ♡　イグイグイグぅうう〜ッ♡」
　絶頂の余韻に浸っている暇もなく彼に抱き起こされた。今度は背面騎乗位で突き上げられる。激しい律動に合わせて胸が大きく揺れた。一番奥まで突き上げられて目の前がチカチカした。
「おお、うおおおおっっ！　イクっ！　またキテる！　イキ続けてまあああすぅぅ！」
「さっきから何回イッてる？」
　分からない。そんなこと数える余裕とっくになくなっていた。

「わかんなぁいぃ……もうずっとぉ……ずーっと気持ちいいぃいいい！」
「じゃあ、何回イッても一緒だな」
そう言うと彼はピストン運動をさらに激しくさせた。
「やらあああっ！　壊れちゃうぅ！」
「大丈夫だ。壊れても俺が一生面倒見てやるから安心しろ」
マリアンネは涙を流しながら首を横に振った。ここで一生暮らすなんて無理よ。私は総大司教様直属のプリースト。今は捕らえられ、体を穢されていたとしても、いずれは神の家に帰らなければ。
未だ完全に折れない女プリーストの心を感じたコンスタンティンは、ご自慢の男根で屈服させるべく彼女の腰を掴んだ。そして強引に自分のほうへ引き寄せる。
「ああっ！　だめっ！　駄目ぇ！」
ただでさえマリアンネ自身の体重で膣奥まで肉棒が突き刺さる背面騎乗位。そこへ持ってきて体を一段深く引き寄せられれば、コンスタンティンの長大なペニスが根本の根本まで深く突き刺さる。マリアンネの膣洞は行き止まりの壁をさらに押し広げられた。膣だけでなく腹部の内臓までも犯される。
「ふわぁあああっ！　深いぃ♡　そんな、こんなの、むりです、はいらな、ああっ！」

マリアンネは目を見開き、涙を浮かべながら訴えた。しかし、コンスタンティンは構わず腰を動かし、何度も何度も女体の秘奥に必殺の一撃を送り込む。

「んおぉっ♡　おほおぉっ♡」

マリアンネは獣のような声を上げ、必死に腰を浮かせようとするが、腰を掴んだ彼の手が邪魔をして逃れられない。

「ひぎぃっ、ひいいんっ、ああっ、ああっ、ああっ」

マリアンネの瞳が裏返りかけた頃、ようやく彼女は解放された。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

マリアンネは肩で息をしながら、ぐったりとベッドに横たわる。

「こんなに気持ちいいこと、教会じゃ教えてくれなかったろ」

肉の欲と無縁で過ごしてきた女は小さくうなずく。

「ここで暮らせば今後も一生これを毎日してやるぞ。俺の妻になると一言約束するだけでいいんだ。言え」

マリアンネは唇を噛んで俯いた。

「私は……あなたの妻になるわけにはいきません。これは、神が定めた道に反することです」

「お前の信仰心は立派だが、その前に女であることを忘れているな。女が男に逆らうということは、こういうことだ」
「あっ、ああっ、嫌っ、続けてはっ、はっ、はああんっ」
「お前の体は正直だぞ。こんなにも濡れて、こんなにも悦んでいるじゃないか」
「やめて……ください……こんなの、間違っています……あっ、はああっ」
再びベッドの上でうつ伏せにされたマリアンネは、背後からの陵辱を受けていた。今度は両手首を掴まれ後ろに引っ張られる。上体が浮き、不安定な膝立ちで彼の抽送を受け止めた。
まるで馬が手綱を引き絞られるような格好で背後から犯される。
「やめてください……こんなの……おかしいです……ああっ、ああっ」
「お前は俺の女だ。妻だ。いいな」
「いや……です……あっ、はあああっ」
マリアンネは拒絶の意思を示すが、その表情は甘く蕩けていた。肉体は彼女自身の心を裏切り、男根の挿入を歓迎するように蜜を溢れさせていた。
「う、ああっ、こ、こんな、こと、いやあっ！　人はもっと真面目に生きるべきです。あなたの堕落した生活は私の学んできた教義に反します。到底受け入れられません」

「お堅いな。だがマリアンネの好きな男は真面目なタイプだというなら、それに合わせてやることも吝かではないぞ」
彼は相変わらず腰を突き出しながらそんなことを言う。
「だが今日のところは今までどおりの俺で我慢しろ。明日はお前の好みにも多少は合わせてやる」
どういう意味かと聞き返す余裕はなかった。彼の手がマリアンネの手首から肩に移る。より上体を起こされ膣のお腹側に肉棒がめり込んだ。腹部に圧が加わるとGスポットが刺激され子宮がキューンっとしてしまう。
同時にポルチオを優しく圧迫されて肉筒全体が切なく疼いた。下腹部全体に甘い痺れが広がり、快感物質が分泌されて頭がぼうっとする。
「あん、あ、あ、あ……」
口から漏れる声が止められない。
(すごい……この体勢……いつもより気持ちいいところ……ぜんぶいちどにされる♡♡)
亀頭の先端が最奥部に当たっているのが分かる。
「あぁぁっ、そこぉっ、ぐりぐりってしたらぁっ！」
ポルチオへの責めが激しさを増す。マリアンネの肉体は小刻みな震えが止められない状

態になっていた。
「射精すぞ」
その瞬間、大量の精液が解き放たれた。熱い粘液が大量に注ぎ込まれる感覚を得て、マリアンネの背筋が大きく反った。膣内では白濁が逆流を始めており、結合部から溢れ出していた。
（出されてる……すごい量……）
膣内の痙攣が止まらない。男の精を受け入れたことで、女の器官が強く反応しているようだった。
「はぁ……すごいです……」
恍惚とした表情で呟く。そんなマリアンネの頬に口付けを落とした後、コンスタンティンは彼のものを引き抜いた。栓を失った淫裂からは白いものがドロリと流れ出す。その様子を見たマリアンネは顔を赤くし、視線を逸らした。

※

次の日からコンスタンティンは執務を専用の部屋ではなく、寝室で行うようになった。大

仰な椅子と机を運び込み、仕事環境を整えると早速書類に目を通し始める。
「なにをしているんですか」
ソファの端に座ったマリアンネが聞く。彼女の座っている場所からは王の姿が真っ正面に見えた。そのように臣下が部屋の模様替えをしていったのだ。
「お前に俺の真面目な姿も見てもらおうと思ってな。マリアンネは俺のことを放蕩で好色なだけの男と思ってるかも知れないが、俺は俺なりに自分の立場や責任を理解してるんだぞ」
彼はそう言うと手元の書類に目を通す作業に戻った。机に視線を落としたまま言う。
「俺が好き勝手やって許されるのは、仕事中は集中してやるべきことを片付けるからだ。遊び惚けているだけの王様なら首をはねて良いというのが我が国の気風だからな」
マリアンネはコンスタンティンの言葉を聞きながら、彼が見ている書類の内容を想像した。おそらくは国内各地から送られてくる陳情書だろう。地方都市には中央からの指示で働く下級役人が数多く存在する。彼らは日々各地の名主から上がってくる様々な案件を処理するために奔走しているはずだ。
全てがコンスタンティンの手元まで届くわけではないだろう。途中で役人が精査して要不要を決め、要件を満たしていると判断されたものでも重要度が低いものは役人の裁量で実行されるはずだ。

それでも何割かは国王の決裁がなければ動かせない難事業もあるだろうし、それだけでも王国中から集まってくれば相当な数だ。

それら一つひとつに目を通して判断しなければならない。コンスタンティンは一日に何時間もその作業を黙々と続けた。

「こんな姿を見ていて退屈じゃないか？」

ついつい物珍しげに執務中の彼を見ていると、不意に顔を上げてきたコンスタンティンと目が合った。

「いえ、お気になさらずに続けてください」

マリアンネは首を横に振る。

「少しは俺のことを見直したか」

コンスタンティンは立ち上がるとマリアンネのそばへ歩み寄った。そしてソファに腰を下ろすと、彼女の肩を抱き寄せた。

「陛下。いけません！」

「少し休憩するだけだ。お愉しみは夜まで取っておくたちなんでな」

マリアンネの耳元に唇を近づけるとコンスタンティンは囁いた。彼女は頬を赤らめる。そんな様子を楽しげに見ながらコンスタンティンは言葉を続けた。

「俺はお前のことが本当に気に入ってしまった。体だけじゃない。いや、もちろん体の相性が最高なことは、マリアンネも知ってると思うが」
　マリアンネは何と答えてよいか押し黙る。無言で彼に話の続きを促した。
「お前は俺にとって最高の女だ。お前のことを考えれば、どんな面倒事も乗り越えられる気がする。マリアンネには一生ここにいてもらいたい」
「無理を言われては困ります。それは私に教会を裏切れと言ってるも同然のこと」
「俺の妻になるだけだ。それの何がいけない。愛する男と女が添い遂げることを邪魔する神がいるのか」
　マリアンネは首を左右に振った。
「私は神に仕える身です。そのようなことできるはずがありません」
「だったら俺がお前の神になってやる」
「そんなことを口にしてはいけません。恐ろしい」
「俺のものになるんだ。そしたらもう怖いものなどない。俺が守ってやる」
「あなたが神を冒涜するような行為を繰り返せば、いずれ神罰が下ります」
「お前を娶れるなら神にだって反逆しよう。それが愛だ」
「違います！　あなたは間違っています」

「この話し合いは平行線だな。神など坊主どもが金を巻き上げる口実としか思ってない俺と、神に仕えることが己の人生だと思っているマリアンネでは、神の存在を前提に議論したところで分かり合えっ子あるまい」
「神はいます！　あなたは神の教えを誤解しています」
「俺が信じるのは俺自身だけだ。だから俺は、お前を説得するためなら、俺自身を賭ける」
「どういう、意味ですか」
恐る恐るマリアンネは尋ねた。この人は何か恐ろしいことをしようとしている。取り返しのつかないことを。急に不安な確信が彼女の胸に宿った。
だがコンスタンティンはその問いに対して答えなかった。代わりに彼はマリアンネの体を引き寄せた。
身をよじって逃れようとするが、腕力の差は大きく抵抗らしい抵抗にならない。彼に顎を掴まれ、上を向かされる。
「……んぅ……ちゅ、ん、ちゅ……」
何度も角度を変えてキスされる。深く繋がり口内を掻き混ぜられるキスも、唇や鼻頭に軽く触れるだけのキスもたくさんされた。性器を結合させたときを思わせる緩急自在、硬軟取り混ぜたキス責めに頭がクラクラしてくる。

「……ぷはっ、はあ、はあ……」
ようやく解放された時にはマリアンネの顔は真っ赤に染まっていた。
「い、いきなり何を……」
「言ったろう？　お前を愛してるんだ」
彼の目は真剣だった。その瞳に射すくめられて動けなくなる。マリアンネは自分の鼓動が早まるのを感じた。
「いずれお前にも分かるときが来る。約束しよう。その時が最後だ。その時の俺は全身全霊を懸けてマリアンネを堕としにかかる。そこでお前が俺に靡いてくれなければ、俺は諦めざるを得ない」
相変わらず彼が何を言いたいかは分からなかった。ただ彼の瞳には確かな決意が宿っている気がした。

※

月日は流れ行きマリアンネが王宮に来てから一カ月が経った。教会への連絡が途絶えて三週間。果たして総大司教はこの状況を何と見ているだろうか。普通に考えればマリアン

ネは任務に失敗し、内部告発者と共に消されたと見るだろう。

まさか国王の寝室で夜ごとに寵愛を受けているとは思うまい。

彼の男根は毎日のようにマリアンネの蜜壺を掻き混ぜた。真面目な聖職者だった彼女の肉体は、今や完全にコンスタンティン専用に造り変えられてしまっていた。

数え切れない絶頂を刻まれ、そのたびに耳元で王妃になるよう説得された。ここまで拒み続けられたのは意地だった。彼が偲ばせている腹案とやらを見るまで中途半端なところで降参できない。それさえ乗り切ってしまえば何が何だか分からないが解放してくれるらしい。彼は噂どおり好色で絶倫だが嘘つきではないとマリアンネは感じていた。

「やっと準備が整った」

マリアンネの王宮生活が切りよく三十日目に達した夜。若い王は今日こそ彼女を屈服させてみせると自信満々に寝室へ乗り込んできた。

いつものように服を脱ぎ捨て全裸になると、ベッドの上に横たわる彼女の元へ歩み寄る。何度目とも知れない情交を繰り返してきた二人にとって、もはや裸身を晒すことに羞恥を覚えるような段階ではない。

私はなんて破廉恥な女になってしまったのだろう、ここを無事に抜け出せたとして逞しい男性に抱かれる熱い夜を忘れられるだろうかとマリアンネは気を揉んだ。

(馬鹿なことを言ってはいけない。今の状況が間違ってるのは明白なのだから。忘れるの。そして元の私に戻るのよ)

「言ったとおり今日で最後だ。今宵限りでマリアンネは俺のものになる」

うそぶいた彼に唇を塞がれた。いつもどおり強引だが愛情たっぷりのキス。抵抗なんて無駄だと言うように割り込んでくる彼の舌。二匹の蛇が口内でもつれ合う。

コンスタンティンの手がマリアンネの胸に触れる。形を確かめるように撫で回したあと乳首に触れた。指の間に挟んで優しく擦られる。既にそこは充血しきって固くなっていた。人差し指と中指の間で摘まれると思わず声が出てしまう。

「あっ、あん……陛下……」

彼の手が乳房を持ち上げるように掴む。そのままゆっくりと捏ね回す動き。肉体を解されながら心の鎧も脱がされる。

彼の舌が首筋から鎖骨へと這い落ちてくる。そこで止まってくれるはずもなく、豊かな胸の頂を目指して登ってきた。蕾のような突起を舌先で転がされる。

「ひうっ、あぁんっ、そこっ、だめぇっ」

「マリアンネの体は敏感だな。どこを舐めても甘い声を出す」

茶化すような言葉も完全には否定できない。ここに来たばかりのころとは違う。明らか

に自分たちの関係性は変化していた。
　初めは嫌悪感しか覚えなかった相手と、今では当たり前のように体を重ねてしまっている。特に今日は最後だから、いくら気持ち良くなっても妻になると認めさえしなければ良いのだからと己を甘やかしているせいだろうか、いつもより快感が大きいと感じた。
　彼が私の胸で夢中になっている。そう思って見下ろせば、彼の指の間から柔肉がむにゅうとはみ出している。男に揉まれて熟れた女の肉だ。
　すっかり大きくなった先端部を口に含まれ吸い上げられたり甘噛みされたりすると、下腹部の奥がキュンと疼いてくるのが分かった。早く欲しいという欲望が頭をよぎる。それを自覚した瞬間、マリアンネは自分が淫らな生き物になったような気がした。そんな自分を否定したくて慌てて頭を振る。だが一度浮かんだ考えはなかなか消えてくれない。それどころかどんどん強くなっていくばかりだ。
「こっちを向いてくれ」
　コンスタンティンの指が顎を掴み、再び彼の方へ向き直させられた。深い色の瞳には情欲の色が見て取れた。
「最後になるかもしれない夜なんだ。お前の顔を見ながらしたい」
　舌を絡め合い唾液を交換しながらお互いの体をまさぐり合った。コンスタンティンがマ

リアンネの乳首を摘まみ、こよりを作るように捻る間、彼女のほうからも彼の硬くなり始めた男根に指を這わせる。

「いやらしい手つきだ。これも全部、俺が教えてやったことだと思うと格段に気持ちいい」

そして彼の手が彼女の秘所に伸びる。割れ目に沿って指を滑らせる優しい愛撫の後、指が膣内に入ってきた。待ち望んだ感覚に身をくねらせる。愉悦が腹の底で暴れていた。

コンスタンティンの長い指が蜜壺を掻き回すと、ぐちょぐちょとはしたない音が立った。粘度のある液体が溢れ出し太腿を伝ってシーツを濡らしていくのが分かる。

「直接触られる前からこんなに濡らしていたのか？　淫乱になったな」

彼が耳元で囁く。その声音は侮蔑ではなく愛しさに満ちていて、かえって彼女の羞恥心をかき立てた。

「言わないでください……お願いですからぁ……」

恥ずかしさのあまり消え入りそうな声で懇願してしまう。

「もっと声を聞かせてくれ。お前の可愛い声が聞きたい」

コンスタンティンが耳の穴にまで舌を差し込んでくる。鼓膜に直接響くぴちゃぴちゃという音にも犯されているような気分になってゾクゾクする。同時に陰核を撫で回されるとそれだけで軽く達してしまいそうになった。

「あぁっ！　いやぁっ！」
マリアンネが身を捩ると、その動きに合わせて大きな胸が揺れる。それを見てコンスタンティンは満足げに笑った。
彼の手管に翻弄される最中でも、彼女の右手は男根を握っていた。先走り汁を塗り広げるように上下に擦った。時折亀頭の部分に指先を立てるようにして刺激する。そうするとさらに鈴口から透明な粘液が滲み出てきて、それが潤滑油となり手の滑りをよくしてくれる。
マリアンネの手の中でペニスがピクンと跳ねた。彼を悦ばせてあげられている。それに幸せを感じるくらい心が毒されていた。
「そろそろ入れたいんだがいいか？」
「はい」
マリアンネは小さく頷いた。
もう心の準備はできている。彼女は自ら足を開いた。濡れそぼった秘部を見せつけるような体勢で、男を迎え入れるために腰を浮かせた。そこに熱いものが押し当てられる。
ゆっくりと侵入してくる肉棒の感触を味わう。サーモンピンクの肉を割り開き、猛り狂った怒張が奥へ奥へと進んでいく。膣壁を擦り上げられる感覚に悶えた。大きすぎる亀頭に肉ヒダが巻き込まれる。

やがて最奥まで到達すると動きを止めた。子宮口が押し上げられているのが分かる。隘路を一杯に押し広げながら、彼のイチモツがドクンドクンと脈動していた。まるでお腹の中にもう一つ心臓ができたみたいだと思った。

マリアンネの中が完全に満たされていることを確認すると、コンスタンティンはゆっくりと抽送を開始した。最初は緩慢な動作だったが、徐々にスピードを上げていく。ぱんっぱんっと肌同士がぶつかり合う乾いた音が響いた。

「ああっ、ふあっ、うあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

ここへ来る前は男の味など知らなかった貞淑な聖職者も、今は一匹の雌になり果てていた。汗ばんだ肌に長い髪が張り付く。悩ましげに眉根を寄せて快楽に耐えている姿は扇情的だった。

「はあ、ああ、あぁぁっ、んくぅっ、ふうっ、はぁ、あんっ、んんーっ」

「今日も快い声で鳴くじゃないか」

太幹を根本まで押し込み、結合部を密着させた状態でコンスタンティンが囁いた。みっちり奥まで埋め尽くした肉棒が膣内で回転する。彼の腰が何者かに見せつけるように、ゆったり旋回していた。ただ膣内を攪拌されるだけでなく、そうされると彼の下腹部にクリトリスが擦れ、マリアンネは堪らない気持ちになる。

「んあぁぁっ、はあっ、はあぁっ、ああうぅ、んふうぅっ、ふあああぁぁっ」
「本当にマリアンネは、ここを捏ねられるのが弱いな」
そう言った彼の手が結合部に伸びてくる。
「ああんっ、あ、ああ、ああ、気持ちいいっ、はあっ、ああん、あんっ、あああぁっ」
膣内を硬く太い男根で擦られながら、包皮を剥いた陰核は彼の指で弄ばれる。これで艶めかしい喘ぎ声が漏れるのを我慢しろと言うのは無理な注文だった。
強烈な快感に身悶えしながら、無意識に腰を揺らしてしまう。いつの間にか縦の動きを再開したコンスタンティンに合わせ、マリアンネは横に腰をくねらせた。より深く彼のペニスを飲み込むようにしながら、濡れた媚肉を纏わり付かせ愉悦を分け合う。
意識しての動きではなかった。彼が腰を律動させたらどう応じれば良いか、無意識でも実践できるまで覚えさせられていた。
自分の肉体が自分のものではないような感覚に陥る。彼に抱かれるまでこんな感覚があることを知らなかった。女プリーストの体は今、完全に国王の支配下に置かれていた。
「ここを弄られるとすぐにイクんだろう？　いいぞ、好きなだけイケばいい」
彼は意地悪く笑うと、いっそう強く肉芽を摘まんだ。下半身が揺れる。震えるクリトリスを愛液塗れの指先で、にゅちゅぬちゅと捏ねくり回される。目も眩むほど気持ちいい。そ

んな体験があるなんて彼に抱かれるまで知らなかった。
「ふあぁっ！　やんっ！　だめっ！　そんなっ！　やんっ！　クリッ、クリトリスだめええええっ！」
　肉悦に戦慄く媚肉は振動しながら窄まり、硬い剛直を食い締める。その締め付けに逆らうように、コンスタンティンの男根がマリアンネの中を往復した。ピストン運動を繰り返すたび、子宮口を突き上げられ脳天まで痺れるような快感が走る。
「あああああぁぁっ！　ひっ、ひぃぃっ、ひいっ、ひいいいいっっっ！」
　半狂乱になりながら叫ぶことしかできない。もはやまともな思考能力など残っていなかった。
「凄い締めつけだ。そんなにいいのか？」
「いやぁっ、ちがっ、ちがうんですっ、これはっ、違うのぉっ♡♡」
「今さら俺たちの間で隠し事などよせ。それに気持ちいいか気持ち良くないかは、単なる状況説明だ。今日までだってしてきたことだろ」
　彼は膝立ちになると、のし掛かるような体勢に変えて抽送を始めた。
　その体位では彼のペニスが出入りしている様子がよく見えた。先端近くまで引き抜かれたかと思うと、見せつけるようにしてから再び根本まで挿入される。ずぶりと膣奥にまで

突き込まれて、亀頭がポルチオを刺激するたびに、お腹の奥でマグマのような熱が弾けた。
「そごぉっ！　らめぇっ――！」
「ここがどうしたんだ？　ほら言ってみろ。どうしてダメなんだ？」
「おぐぅっ♡　おくきもちいぃですっ！　もっとしてくださぃぃっ♡♡」
「そうやって正直に言えるほうが偉いぞ。望みどおりにしてやる」
「あっ、あっ、あっ、あっ！　それしゅごいぃぃっ！」
「これでもまだ俺の妻にならないか。本当に強情な女め」
腹を立ててる風ではない。本当に仕方ないなと愛おしげに呟く口調で彼は言う。そしてさらに激しく膣奥を攻め立てた。
「んぅっ！　あっ♡　はげしっ！　あんっ♡　あぁんっ♡」
彼の動きに合わせて尻を振りたくってしまう。そうするとますます深くペニスが突き刺さった。快楽神経を直接殴られているみたいだった。
「この体位だとお前の顔がよく見えるな。とても可愛い顔をしているぞ」
「そうやって私を籠絡しようとして」
「本当なんだからしょうがないじゃないか。もっと感じてみろ」
ほとんど真上から叩きつけられるような抽送。マリアンネの女芯の奥底にあるものを引

きずり出すかのようなストロークだった。
激しい突き込みを受け止めるたびに甘ったるい声が漏れてしまう。マリアンネの膣内はすっかり潤みきって、大量の愛液を垂れ流していた。
「何度教えても分からないようだから、今度は直接体に刻んでやる。お前はこれからもずっと俺のものだということをな！」
彼の右手がマリアンネの下腹部に触れてきた。臍と女陰の中間やや女陰側の位置。彼の手が触れた場所から熱が生まれる。
下腹部に触れた彼の手のひらが、何かを流し込んでくるのを感じる。それは熱い血潮のように体の中を巡り、やがて全身に行き渡った。
――直後、マリアンネは身震いし、熱い吐息を漏らす。
まず最初に感じたのは、猛烈な渇き。喉がひどく乾いて、唾を飲み込むがまるで足りない。体中の水分が抜けていくようだった。
次に感じたのは、強烈な飢え。空腹なんてレベルじゃない。肉を食べたい、水を飲みたいという欲求が際限なく湧き上がる。その二つが同時に襲ってきて、マリアンネは気が変になりそうだった。
彼女は己の腹部を見た。今しがたコンスタンティンに触れられた場所では、淫猥な刻印

が怪しい光を放っている。
　淫紋だ。魔物の刻印。プリーストである自分が魔物の能力の支配下に置かれたのだ。
「どうした？　顔色が悪いぞ」
「あ……あぁぁ……」
　マリアンネは驚きと恐怖に満ちた掠れ声を上げた。
「どうした？　具合でも悪いのか？」
「ひぁぁっ！　あひっ！　あふぅぅぅぅっ♡♡」
　コンスタンティンの動きは変わってない。だというのにマリアンネの感じる快感の度合いは明らかに桁がひとつ、ふたつ上がった。膣奥を突かれるたびに、子宮口に亀頭がぶつかるたびに、マリアンネの視界は点滅する。
「陛下はこれが何かお分かりなのですか。これは魔物の淫紋。女を強制的に発情させる術です」
　そして、淫紋発動中に与えられた絶頂感は、術者への好意にすり替えられる。
　女性として忌むべき魔術の存在は知っていた。この刻印を刻まれた女は定期的に術者の男に精液を恵んでもらわなければ、生きていけないようになる。そうやって女を傀儡化する魔物と戦ったことがあった。

魔物の術を使えるということは、コンスタンティンは魔物と契約したのか。それならばいよいよ教会の敵。絶対にマリアンネは彼に屈してはならない。

薄れかけていたプリーストとしての職業意識が目覚めたマリアンネとは対照的に、コンスタンティンは憎らしいほど冷静だった。

「ああ知ってるよ。ただしこれは少し特殊な契約をしていてね。効果が続くのは今夜一晩だけ。明日の朝には綺麗さっぱりお前の体から淫紋は消える。そして、それまでにマリアンネが心の底から俺に心酔し、俺のものになりたいと感じてくれなかったら」

そこでコンスタンティンは言葉を切り、唇の端を持ち上げた。

「俺は死を迎えることになる」

「いったいなぜ魔物とそんな契約を」

「言ったろ。マリアンネに今日まで信じてきた人生を捨てさせるんだ。それに見合った賭け金を用意するって」

だからって自分の命を賭けると言うのか。私みたいな法術が使える以外はただの女のために。

「淫紋の力で完全に私を支配すれば、首を縦に振らせることも簡単だったでしょうに」

そうなれば彼の精液なしでは生きられないのだ。彼の傍を離れるわけにいかない。

「それはあまりにも俺に有利すぎてフェアな勝負にならないだろう。だからと言って今の状況が不公平じゃないとは言い切れんがな」

彼はそう言って笑うと、すっかり話に夢中になって止まっていた腰を動かし始めた。

「あっ♡♡　ああっ♡♡♡　すごいっ、これっ、あっ♡♡　あっ♡♡　んっ♡♡　ああっ♡♡」

ただでさえ肉体は彼に屈服してるのに、淫紋がそれを加速させてくる。

膣内を往復するペニスが気持ちいい。クリトリスを捏ねる指が気持ちいい。子宮口をノックされるのが堪らない。そのどれもが彼に抱かれている実感を与えてくれる。

「改めて結婚を申し込む。お前に恋するあまり馬鹿げた方法で同情を買おうとする男を少しでも哀れに感じるなら――こんな男を死なせたくないと感じてくれるなら、どうかお願いだ、俺と結婚して欲しい」

この期に及んでズルい。いつも居丈高で自信満々な彼が、たったひとりの女を物にするため跪く勢いで懇願してくる。それは命が惜しいばかりではあるまい。保身だけでは説明できない真摯な想いをマリアンネも確かに感じ取っていた。

「……はい♡　わかりましたぁ♡　あなたと結婚させていただきます♡♡」

「ありがとう。これで俺たちの結婚が決まったな」

彼は嬉しそうに笑った。
「それではまず誓いの言葉を交わそう」
そう言うとコンスタンティンがマリアンネを抱き上げる。二人は対面座位の体勢で向き合った。
「汝カテリーナ・マリアンネ・エレールマイヤーは、健やかなときも病める時も、夫たるコンスタンティン・フォン・ワイエンマイアーを愛し、敬い、慰め、助け、その命ある限り、真心を尽くすことを約束するか？」
「はい、私はあなたの妻となり、永遠に愛することを誓います」
「では次はお前の番だ」
「はい。……えっと、コンスタンティン・フォン・ワイエンマイアーは、健やかなときも病める時も、妻たるマリアンネ・エレールマイヤーを愛で、敬い、慰め、助け、その命尽きるまで、マリアンネを愛することを、ここに誓ってくれる？」
「もちろん誓うとも。マリアンネ、お前は俺の妻となるんだ。当然だろう。それじゃあ次は近いのキスだ」
「はい♡♡」
マリアンネは目を閉じて、自ら唇を差し出した。

「んちゅっ♡　んんっ♡　んっ♡　んっ♡　んっ♡」

舌同士が絡み合う深いキス。およそ結婚式でやるものではない、ディープな口付けを交わす。

「じゅるる、れろっ♡　んむ、れろっ♡　んう♡　ん、ちゅっ、ん♡」

口付けを交わしながらマリアンネは妖艶に腰をくねらせる。先ほどまでの一方的に貪られる体位とは違う。自分も自由に動ける対面座位になったことで、マリアンネはより深く貪欲に求めるようになっていた。

両足を彼の背中に回し、さらに奥まで繋がろうとする。二人の体は隙間なく密着していた。互いの胸が押しつぶされ、柔らかな感触を伝え合っている。

マリアンネは両手を彼の首の後ろに回している。彼女の顔は上気し、瞳は潤んでいる。唇を離すと、唾液の橋がかかった。

マリアンネは彼に抱きつき、耳元に顔を寄せた。

「好き♡　好きです、コンスタンティン様ぁ♡」

本当はもっと前に言いたかった。ずっと彼に屈服したかったのだと今なら素直に認められる。これまでは己の立場を考えると受け入れられなかった。本心を押し留めていたしがらみを裁ち切り、彼女は想いを告げる。

「俺もだよマリアンネ。愛してる」
マリアンネの最初で最後になるであろう異性への告白を、旦那様になった男性は受け止めてくれる。
「ん……んぅ」
マリアンネのほうから彼の口に吸いつく。何度も何度も、啄むように。その仕草はまるで幼子のようだった。
「んぅ♡　んぅっ♡　ちゅっ♡　ちゅうぅぅっ♡」
彼の手が背中を撫でてくる。心地よい。
「あっ、んんっ♡」
その手に促されてマリアンネは身をよじらせた。自然と腰がくねってしまう。そんな彼女をコンスタンティンはじっと見つめている。
マリアンネはゆっくりと視線を上げる。すると彼と目が合い、微笑まれた。
「せっかく用意したし使っておくか」
いつか初めての夜を過ごしたときと同じセリフを口にしたかと思うと、コンスタンティンはマリアンネの淫紋に力を流し始める。
チリチリと下腹部が熱くなる。それは子宮にまで及んだ。マリアンネが身震いをすると

同時に、子宮から膣道へと快楽の奔流が流れていく。
「はあああぁぁ〜♡」
生殖器全体に直接響く強烈なオーガズム。マリアンネの理性は吹き飛び、絶頂の余韻に浸りながら本能に従って腰を振り始めた。
「あっ♡　あっ♡　んふぁあああぁぁ♡　イってる♡　イッてるのにぃ♡　腰が止まらない♡　あっ、あっ、あっ、あっ♡」
マリアンネは自ら尻を上げ下げして彼の肉棒を膣奥に叩きつけた。絶頂直後の子宮が痙攣し、亀頭に吸い付いた。
「あっ♡　はぁあぁぁんっ♡」
亀頭が奥に触れるたび、意識を白く塗り潰すような激悦が生まれる。それが堪らなくて、つい乱暴に尻を振り下ろしてしまう。
「期待以上の乱れっぷりだな。これが今夜一晩だけとは惜しく感じる」
「ダメです。これは今夜だけ。朝になったらきっぱり魔物とは縁を切ってもらいます」
「ああわかってるさ。俺は魔物との契約を破棄し、二度と奴らとは関わらないと誓おう」
「絶対ですよ。約束を破ったら離婚ですからね」
「絶対に、だ」

「はい♡」

そうこうしてるうちにマリアンネの肉体は限界を迎えつつあった。

「あっ、あっ、あっ、イクッ、もう無理、イクゥウウッ！」

全身を震わせ彼女は絶頂に達してしまった。そしてその瞬間、淫紋の効果によって術者に恋をしてしまう。術者のことが大好きになり、離れられない体になってしまう。だが今のマリアンネに変化は起こらなかった。既に彼女は旦那様のことが大好きになっていたからだ。

それからマリアンネは、今日のために用意させておいたというウェディングドレスに着替えさせられた。どうやら一カ月もかかったのは魔物を呼び寄せるためではなく、このドレスを用意する期間だったらしい。

「ウェディングドレスで新妻を犯すのは男のロマンだ」

変態じみたことを言う旦那様に、この人やはり性欲で物を考えているのではと疑問に思ったものの悪い気はしない。いろんな格好で自分と繋がりたいということだから。

ドレスは王妃の結婚式にしては簡素なデザインだったが、彼曰く「これは初夜用」で本番の式にはもっと豪華で見栄えのするものを用意しているそうだ。

「まだ神前で報告もしていないのに初夜とは言えません」

「愛する二人が今日を初夜と決めれば初夜だ。さっきの誓いだって俺はマリアンネに向かっ

て誓ったつもりだ。いるのかいないのかも分からん存在に誓うことなどない」
「もう。なぜ魔物はいるのに神はいないと言うのですか」
「魔物は見たことあるが神とは会ったことないからな。俺の世界は俺が基準なんだ」
以前のマリアンネなら、不信心極まりない言動のコンスタンティンに神の教えを説こうとしたかもしれない。だが今の自分に何が言えよう。
教会から密命を帯びてやって来たはずの場所で男に籠絡され、信仰より女の悦びが上回ってしまった自分が何を言っても、言葉が上滑りしてしまう。そう思うと彼女は口を噤むしかなかった。
代わりにコンスタンティンに手を引かれベッドに上がり、仰向けに寝そべった彼の腰に跨がる。騎乗位の体勢でゆっくりと腰を沈めていった。
「あはぁ♡」
膣内を満たす圧倒的な質量の充足感に、マリアンネは思わず恍惚の溜め息を漏らしてしまう。その心地よさに酔い痴れるあまり、挿入しただけで果ててしまいそうだった。コンスタンティンは下から突き上げたりはせず、こちらの動きに任せてくれている。
「んふぅ、ふわぁ♡」
スカートの中で彼と繋がっている。見えないけど、視覚以上に確かな手応えが、自分た

ちの状況を伝えてきた。
「すごいな……いつもより締まってるぞ……」
　見えないからこそ余計に感じてしまう。幾重にも布が折り重ねられたスカートの向こうで自分の蜜壺がどうなってるか想像すると、マリアンネは一擦りごとに達してしまいそうになる。
「んっ♡　ああっ♡　そんな……こと……言わないで……ください……んんっ♡　ああぁっ♡♡」
（こんなに大きくて逞しいもので、これから一生愛してもらえるなんて）
　彼のモノは大きいだけでなく形も良くて、反り返ったカリ首が膣壁のあらゆるところを刺激してくる。膣ヒダを掻き分けられるたびに甘い痺れが生じるし、肉幹の表面にも凹凸があるから粘膜全体が擦られるのだ。こんなもので敏感な粘膜を摩擦されたら神様のことだって裏切ってしまう。
　でもしょうがないではないか。こんなにも気持ちいいのだから。
「ダメっ、これダメなやつぅう♡♡　こんなの知ったら戻れないぃぃ♡♡♡」
「今さらどこに戻るって言うんだ！」
　コンスタンティンが満を持して突き上げてきた。そのまま連続してマリアンネの体は彼

の腰に跳ね上げられる。激しいピストン運動で最奥まで穿たれる。剛直の先端部がポルチオに当たるたび、強烈な悦びが全身を走る。

子宮口は完全に下がりきり、子作りのための部屋を彼に明け渡していた。

愛液は洪水のように溢れ出て抽送の手助けをしているし、秘裂はひっきりなしに痙攣を繰り返して精液を欲しがっている。スカート越しにもグチョグチョ、ぬちょぬちょと粘着質な水音が聞こえるほどだ。

「これは今までの膣内射精とは違うぞ。夫婦になった男女が子供を作るための膣内射精だ。心して受け取れ」

「はい……どうか私に……あなた様の子を孕ませてくださいませ……っ」

言うやいなや彼の肉棒が膣洞で爆ぜた。

「ひぃぐぅうう♡　イ、イきゅぅうう！　お、おおぉおおおお！　ぎもぢ、いいっ！」

子宮に流し込まれる大量の白濁液。あまりの熱さに視界が明滅し、意識を持って行かれそうだった。膣内射精は体験済みだが、心から堕ちて彼の種で妊娠するつもりになったからだろうか。子宮を満たしていく粘っこい感触さえ愛おしく感じる。下腹部から多幸感が発生する。

彼の男根が生み出す幸せに浸りきるため、マリアンネは目を閉じた。そして今回の射精

で子供がデキてますようにと願った。神を裏切り堕落した自分は何に願えば良いのかも分からぬまま。



マシュマロ（感想受け付け）

著者名	猪熊夜離
発行日	2023 年 2 月 7 日
Twitter	@inokuma_yoga
pixiv	3970381
Discord	猪熊夜離#9102

とある国の王を調査するよう言われたマリアンネ。

メイドに扮して潜入したところ法力が使えない部屋に連れ込まれる。

王は若くてイケメンで絶倫。マリアンネと王の体の相性は最高。

王はマリアンネの体にハマり自分の嫁になれと説得してくる。

マリアンネはこれを拒み、もっと真面目に生きなければならないと説教する。

余計に彼女のことが気に入った王は快楽漬けにして結婚を認めさせようとする。